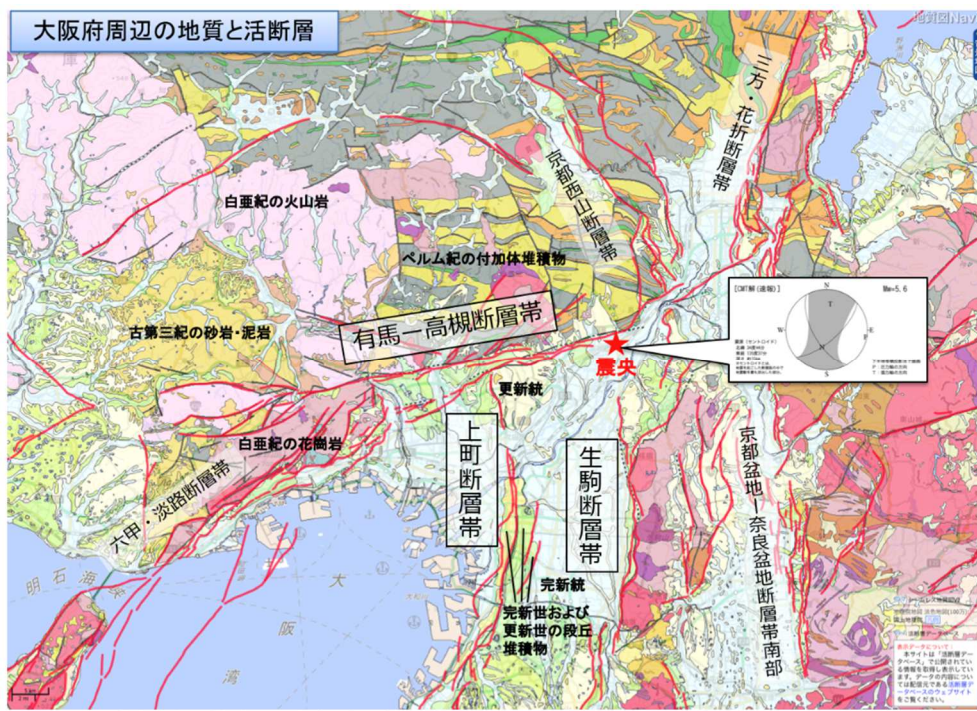


大阪北部地震について

6月18日に発生した大阪北部地震ですが、現時点では2つの断層がほぼ同時にずれ動いた可能性が高い事までは判明してきましたが、まだどの断層かを同定する所までは行っていません。周囲にはメディアでも報道されているように、有馬-高槻断層帯、上町断層帯、生駒断層帯が分布しています。

京都大学は、上町断層と大阪北部地震が関係した可能性は低いと考えており、生駒断層の北部延長に未知の活断層があるのではと推察しています。

また今回の地震は「余震の数が少ない」のが特徴です。これは、もともとの地震のマグニチュードが6.1と比較的小さい事が原因の一つですが、今後の地震活動を考える上では、余震が少ないのは「良いこと」とも考えられます。それは、すぐに周囲の活断層で誘発される大地震の可能性が小さくなるからです。



上の図は、産業技術総合研究所・地質調査総合センターがまとめた、今回の地震の周辺付近の断層です。震央（震源を地表に投影した点）付近には活断層は知られていませんでした。

ただ、近畿地方は地下天気図解析では、大阪を中心とした地震活動静穏化は解消しておらず、これは大阪北部地震の余震が少ないという事と、大阪北部地震では、近畿地方全体の地震活動が大きく変化していないという事を意味しています。もうしばらく継続的な注意が必要と思われます。



首都圏の地下天気図解析®

6月4日のニュースレターに引き続き、首都圏の地下天気図解析です。

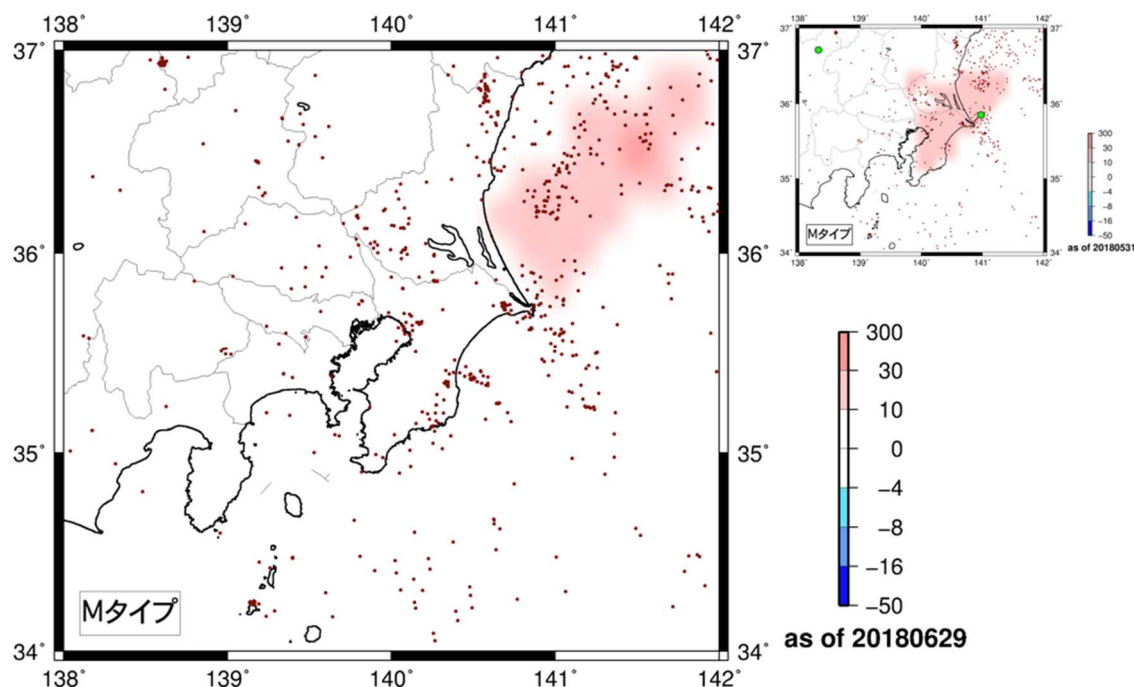
6月には房総半島沖でスロースリップという体を感じない地震（マグニチュード6クラス）が頻発し、それに伴い体感する普通の地震も頻発するという事が発生しました。

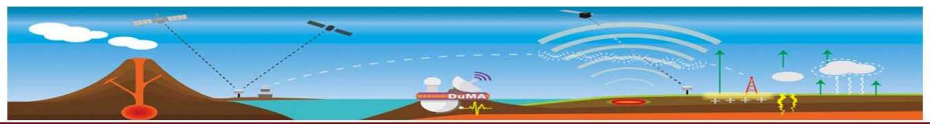
今回はMタイプとLタイプの2つの地下天気図を併せてお示しします。また右上に小さく示したのは、5月31日時点のもので、前回お示した地下天気図です。

下はMタイプの地下天気図となります。右上の5月31日時点のものの中の緑の丸は前回時系列を計算した地点を表します。

Mタイプでは地震活動が活発化している領域（図中で赤く塗られた地域）が、房総半島を中心とした地域から、茨城県沖にシフトしているのがわかります。

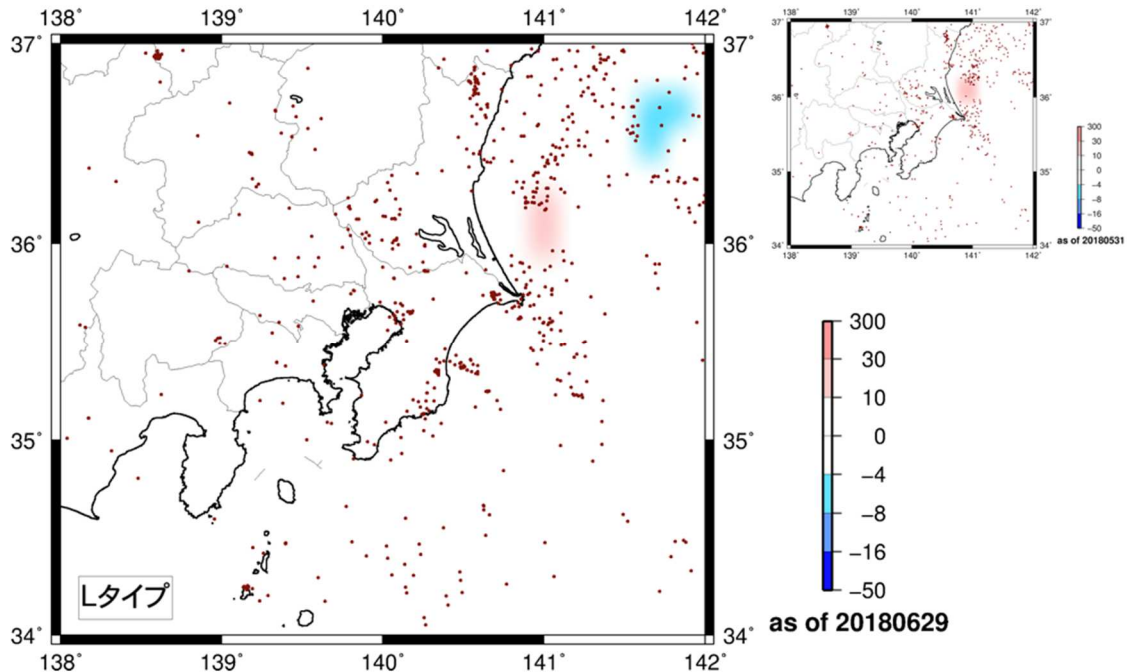
実はこのような現象は、2012年以降では、初めてのケースです。地震活動が活性化中に、中規模の地震が頻発する事がありますので、特に茨城県南部沖合はしばらく注意が必要な地域と思われるます。





次にお示ししますのが、Lタイプの地下天気図です。茨城県沖では、それほど大きな異常となっていない事がわかります。

特に注目しているのが、茨城県北部沖合で、Mタイプでは活性化しているものの、Lタイプでは少し静穏化が観察されます。つまりMタイプとLタイプで違う結果となっています。これは、MとLの計算式（計算アルゴリズム）が異なるためで、どちらが正しいという事ではなく、いずれも正しい結果なのです。



現時点で間違いないのは、茨城県沖でこのような地震活動の活性化現象が発生したのは、東日本大震災以降では、初めての現象であるという事です。ただLタイプでは、それほど顕著な異常となっていないので、非常に切迫した状況とは考えにくいのも事実です。